

『集韻』脱落字について

水谷 誠

一

筆者は、現在、『類篇』での『集韻』未収字を調査しているが、調査が進むにつれ、現行の『集韻』にも本来の『集韻』（以下「原本集韻」と称する）に収められていた字が一部抜け落ちたのではないかと考えるようになった。以下、いくつかを例示してみたい。⁽¹⁾

①上平・模韻・徒小韻において、「駮、獸名。『説文』黄牛虎文」とあり、『類篇』（10上-03-b-2）『集韻』とも見える。ところが、「𩇑」は『類篇』（02上-04-b-4）のみに見え、義注は「黄牛虎文」とある。この「𩇑」は「駮」の異体字なのか。そうではあるまい。なぜなら、『類篇』『集韻』に引く『説文』の説解は大徐本と異なる。この矛盾点を解消するには、「原本集韻」で「駮、獸名。『説文』駮駒也。𩇑、黄牛虎文」あったところの傍点四字が抜け落ちたと考えられないであろうか。念のためいえば、上記「原本集韻」での「駮」と「𩇑」は親字である（③も同じ）。

②下平・僊韻・沿小韻で、『集韻』では「巡」のみ見えるが、『類篇』では、二編中で「巡」（02中-23-b-8）「巡」（02中-11-b-3）の両方見える。義注は、双方とも「相循也」とある。つまり、異体字の関係になっている。

「巡」が落ちたのではないだろうか。

③上声・賄韻・漵小韻において、「確、絲大兒」ある。石偏で、絲の様子をいうのはおかしい。『類篇』(09下-03-a-8)では、「確、大高也」とある。さらに、『類篇』(13上-16-a-7)に『集韻』で見えない「漵」に「又取猥切。絲大兒」とある。この場合、どう見ても、脱落があるようである。つまり、「原本集韻」では、「確、大高也。漵、絲大兒」とあったと思われる。傍点部の四字の脱落で、語義にまで影響を与えた例である。

④上声・賄韻・胎小韻で、『集韻』では「𧈧」のみ見えるが、『類篇』では、(02上-15-a-3)に「𧈧」が見え、(10中-32-a-5)に「𧈧」が見える。「𧈧」では、「又覩猥切。『説文』磊𧈧、重聚也」とあり、「𧈧」では、「丁罪切。『説文』磊𧈧、重聚也」とある。現行の『説文』では、「𧈧」の方に説解は一致する。ちなみに、「𧈧」では、説解が異なるが、別の音である。よって、「𧈧」は「𧈧」の異体字であり、現行の『集韻』では、「𧈧」を書き落とした可能性がある。

⑤上声・迴韻・馨小韻において、述古堂本では「鑿、一足行也」となっている。一方、四部備要本では、「鑿、一足行也」となっている。『類篇』では、「金部」(14上-08-b-7)の鑿に上声・迴韻・馨小韻の音が見え、「又棄挺切、一足行也」とある。また、「足部」の「鑿」(02下-11-b-3)の義注は、「一足行也」とあるが、上声の音はない。これをどのように考えたら良いのであろうか。この場合、「原本集韻」では、「鑿」を異体字扱いとして、「鑿・鑿、一足行也」とできないであろうか。

⑥去声・至韻・媚小韻で、『集韻』では「媚」のみ見える。『類篇』では、

(13中-03-a-3)の「蚊」に「又明祕切。蟲名。如蝦寄龜殼中食」とある。同じく(13中-16-b-2)の「蝟」に「明祕切。蟲名。如蝦寄龜殼中食之、益顔」とあり、『集韻』の義注と全く同じである。「蚊」は、義注末尾の「之益顔」の三文字がないだけで、「蝟」と同義といえよう。よって、「蚊」は「蝟」の異体字と考え、現行の『集韻』では抜け落ちたと考えられないであろうか。

⑦去声・換韻・炭小韻で、『集韻』での「𦉑」の義注は、「𦉑𦉑、無文采兒」とある。そこでは、収められていない「𦉑」が、『類篇』(03下-16-a-5)に見え、義注は「𦉑𦉑、無文采兒」とある。『類篇』(09上-15-a-1)には、もう一方の「𦉑」も見える。そして、「𦉑」と「𦉑」は同音であることから、「𦉑𦉑」は変わった連文である。その際、現行の『集韻』では、二番目の「𦉑」が脱落してしまったのではないだろうか。⁽³⁾

⑧去声・線韻・衍小韻では、『集韻』において「延」についていえば、異体字を表示しない。ところが、『類篇』では、「延」(02中-24-a-4)と「延」(02中-24-a-6)を並べる。反切は同じ「延面切」。義注はどちらも「及也」で同じである。「延」の場合、字体近似による脱落の可能性がある。

⑨去声・線韻・彦小韻で、『集韻』では「諺・彦」が親字として提出されている。この両字とも『類篇』では「諺」(03上-21-b-3)、「彦」(02上-27-b-5)とそれぞれに見える。さらに、『類篇』では、「彦」(03上-21-a-7)が見える。義注「又魚戰切。傳言也」とある。『集韻』では、「傳言」の前に典拠を示す『説文』の二字がある。ただし、『類篇』の「彦」での義注には『説文』の二字はない。この場合も、「彦」と「彦」との字体近似による現行『集韻』での脱落が考えられる。

⑩入声・質韻・聖小韻について、『集韻』四部備要本では「柳」が見えるところを『集韻』述古堂本では「租」が見える。つまり、聖小韻で、四部備要本では「租」が見えず、述古堂本では「柳」が見えない。ところが、『類篇』では、(07中-02-b-8)「租」で「又子悉切。栴柳、禾重生」とあり、(07中-10-b-4)「柳」で「子悉切。栴柳、禾重生」とある。『類篇』では「租」「柳」の両方が見える。おそらく、『原本集韻』では一方が異体字として両方あり、四部備要本・述古堂本ではそれぞれ別の一字が脱落したと思われる。

⑪入声・錫韻・殍小韻について。ここでは『類篇』から述べる。(14中-05-b-5)「積」(14中-05-b-6)「杓」が親字となっており、「杓」は「積」の異体字となっている。そこでの義注は「呼臭切。矛屬。又詰歴切」とある。ところが、『集韻』では「積」は見えない。『集韻』では、殍小韻(呼臭切)も喫小韻(詰歴切)も「杓」のみが見える。親字提出字の先頭字が行方不明となっているのである。この場合、「積」が脱落していると考えられないであろうか。

以上、11例の脱落と思われるケースを取り上げてみた。筆者としては、いずれも現行の『集韻』では、抜け落ちていると考えているものであるが、個別には異論の出るものもあるであろう。ただ、本稿では、脱落と考えざるを得ないものを選んで、ここに取り上げたのであることを敢えていうことにしたい。可能性のあるものをもう少し広く取れば、その数はさらに多くなることが予想される。そこで、さらにこの点について、考察を進めてみたい。上記11例のように根拠や具体例があるとは限らないが、仮に問題点のありかを指摘できれば、ただ『集韻』に脱落字の可能性がありますと報告するよりも意味あるものになるであろう。

二

次に進むに当たって、参考となる例が先の11例の中にある。⑪での親字先頭字が脱落していると思われるケースがそれである。というのは、『類篇』に『集韻』に見えないものが約200例ほどある。このうち、『類篇』で新たに増収したという注記のあるものや、反切が『集韻』と大きく異なるものなどは、「原本集韻」にはなかったと考えてよいであろう。これ以外のものについて、『集韻』からの脱落を一字一字見当して見る必要性がありそうである。ただし、200例弱をすべて考察することよりも、いくつかの例を取り上げて、そこでの『集韻』からの脱落の可能性について、論じてみたい。

まず、わかりやすい例。すなわち、『広韻』（澤存堂本）に見えて、『集韻』に見えず、『類篇』に見える例。

⑫上平・東韻、穹小韻では、『広韻』に「𠂔」を収めるが、現行の『集韻』では「𠂔」とこれの小篆を楷書に直したものを収め、「𠂔」は見えない。ところが、『類篇』（09上-24-a-6）にこの三字を収める。「𠂔」が現行の『集韻』で脱落した可能性がある。なお、「𠂔」は「𠂔」の異体字として三番目にあつたものと思われる。

⑬上平・齊韻・攜小韻では、『広韻』に「𠂔」を収めるが、現行の『集韻』には見えない。ところが、『類篇』（12上-03-a-1）では「𠂔」を収める。ただし、『類篇』での反切は、『広韻』と同じ「戸圭切」となっており、『集韻』の「玄圭切」ではない。⁽⁶⁾反切は『広韻』系となっているが、これも現行『集韻』での脱落のケースと考えられる。

⑭上平・真韻・珉小韻では、『広韻』に「鑿」を収めるが、現行の『集韻』には見えない。一方の『集韻』には、「鑿・鋳」を収めるが、『広韻』には「鑿・鋳」を収めない。『類篇』では、(14上-04-b-6)にこの三字を収める。『類篇』の順を参考にすると三番目の「鑿」が脱落したのではないかと思われる。

⑮上声・腫韻・宄小韻では、『広韻』に「𪔵」を収め、『集韻』ではこれと字体の異なる「𪔶」を収める。『類篇』では、(03上-03-a-5)に「𪔶」を、(07中-27-a-5)を「𪔶」を収める。「原本集韻」では、両字は異体字の関係ではなかったのではないだろうか。そして、現行の『集韻』では、「𪔶」が脱落した可能性がある。

⑯上声・紙韻・褌小韻の例は、少し特殊である。『広韻』では、紙韻・豸小韻の「𪔷」が示す又音「𪔸紙切」＝紙韻・褌小韻には、「𪔷」を収めない。現行の『集韻』も同様である。ところが、『類篇』(06上-03-b-1)には「又丑豸切。𪔷。𪔸。又丈尔切」とある。『類篇』では、新たに『広韻』から増補した可能性もあるが、「原本集韻」で拾った又音字を現行の『集韻』で落とした可能性もある。ただし、どちらかに決める決定的な論拠に欠ける。備忘のため、ここに記すことにする。

以上、上平と上声を見てみたが、このようにいくつか拾い出すことができた。ただし、『集韻』に比べて所収字の少ない『広韻』から上記のような例を多くは望めない。そこで、ここでは推論を交えて次のようなケースを考えて見たい。すなわち、脱落がまま生じている『類篇』において、異体字や又音注記の脱落は致命傷にはなりえない。ところが、『集韻』で異体字も含めた親字グループがそのまま脱落したとしたら、かなり問題となる。これに該

当するものが果たしてあるのかどうか、見てみる必要がありそうである。ただし、このケースは、決定的な証拠が欠けるため⑩までのグループとは異なることをあらかじめ述べておきたい。

⑦上声・旨韻・彘小韻。『説文』九篇下「彘」の反切が「式視切」とあるが、『集韻』のこの小韻に見えない。『類篇』（09下-19-a-1）に見え、義注に「式視切。『説文』彘也」とある。『集韻』の原則からいえば、当然『説文』の所収字を収めることになっており、現行の『集韻』で脱落したのであろう。⁽⁷⁾

なお、これと同様のケースが「崑」であろう。これの楷書体の「弁」は、『集韻』上声・尾韻・虫小韻に見える。『説文』小篆体の「崑」は見えない。しかし、『類篇』（01下-02-b-5）では、「崑・弁」の二字が親字となっている。⁽⁸⁾

⑧去声・稗韻・順小韻。『類篇』部首(04上-17-b-4)「盾」での説解の後に示される最初の音「食閏切」に該当する『集韻』での小韻に「盾」が見えない。もし、意図して『集韻』で落としたりしたら、これは例外となる。やはり、「原本集韻」にあったと考える方が自然であろう。⁽⁹⁾

⑨入声・屋韻・倅小韻。『類篇』（14中-04-a-7）の「駢」について、義注は次のとおりである。「昌六切。相易物俱等、爲駢。又丁侯切。又樞玉切」とある。現行の『集韻』では見出しの音＝倅小韻に「駢」を収めない。その代わり、又音は両方とも『集韻』に収める。これはおかしい。⁽¹⁰⁾

⑩入声・屋韻・囿小韻。『類篇』（02上-29-b-1）の「呶・味」について、義注は次のとおりである。「于六切。行平易也。竝子六切。歎也。一曰、無聲。

或省。……』『集韻』では見出しの音＝囿小韻にこの「呶・味」両字を収めない。並びに以下の「子六切」や省略した「之六切」「前歴切」は、『集韻』に収める。いわば、本家が無視されて、分家のみを拾ったという感じがする。⑬のさらに極端な例と思われる。

以上、現行の『集韻』で脱落の疑われる例を見てきた。この他にも「又音」のみが現行の『集韻』に見えない例が多々あるが、「原本集韻」からの脱落なのか、それとも純粹に『類篇』での増補なのか、どちらかを示唆するような事柄を欠いているため、ここでの考察の対象とはしない。⁽¹¹⁾

上記20例は、『類篇』での『集韻』に見えないもの約200例の十分の一に当たる。この200例をすべて「原本集韻」からの脱落としても、現行『集韻』所収字約五万三千の0.5%にも満たない。また、20例ほどしか提示できなかったが、この20例の提出字からもわかるように、重要な見出し字は少ない。いわば、「原本集韻」から現行本に移行するときの転記者の不注意にその責めは帰せられるであろうが、重要字でもないことを手伝って、たいしたことはないといえよう。むしろ、大規模字典『集韻』で元々の所収字をほとんど漏らさずに今日まで伝わっていることがわかったといえる。その中の瑕疵として、『類篇』との比較対照から、現行『集韻』で少数の脱落字があることがわかったということである。

そこで次に上記考察をもとに、筆者の考えを若干述べてみたい。

三

前稿「『類篇』反切相違の一要因について」（『創大中国論集』14）での結論部において、最初の『集韻』は抄本であることを予想した。つまり、『類篇』完成の治平二年（1067年）以前には、『集韻』の刊本はなかったのではな

いかという仮説である。『集韻』の完成の宝元二年(1039年)から少なくとも30年近く抄本で伝わったのではないかということを『類篇』反切の系統的な不一致から推論した。今回本稿で考察した少数の「原本集韻」からの脱落を見るに、北宋本の面影を伝える述古堂本・有力なテキストである首都図書館本・最も流布する四部備要本などにその脱落の痕跡をほとんどとどめていない。強いて挙げれば、上記の例の中で①③ぐらいであろう。このように痕跡をとどめていないのは、その脱落がかなり早かったことを示すものであろう。

以上、『類篇』を通して、20例ほどの「原本集韻」からの脱落を指摘し、さらに初期『集韻』を知るために『類篇』は重要な資料であることを述べてみた。同じ材料を異なった形態の書物にしたことによって、もともとあった形に遡及できる希有な例であるといえる。こうした点からも、今後さらに『集韻』『類篇』の考察を進める必要があるであろう。

注

- (1) ここでの使用テキストは、これまで使用してきたものと同様である。『集韻』についていえば述古堂本を、『類篇』についていえば汲古閣本を使用した。
- (2) 『集韻』については、該当箇所が容易にわかるため、小韻名を記すのみにとどめる。一方の『類篇』については、大規模部首であると確認の検索に不便であるため、該当葉数を示す。ちなみに、ここでの場合、10篇上・第3葉・裏・2行目を示す。
- (3) 『類篇』のこのケースについて、義注内の文字を新たに親字に立てたと考えることもできる。たとえば、灰韻・回小韻での「回」義注内の異体字「迴」を『類篇』では新たに親字に立てている。このケースも同様に考えることができるが、『集韻』での脱落か、新たに親字に立てたか、決定的な決め手がないことから、とりあえず両方の可能性があるとしておく。つまり、脱落の可能性を排除しないで、ここでの例示をしたのである。
- (4) 一例を挙げれば、『類篇』(06上-13-a-3)「梔」の「徂門切」に関して、「今

『集韻未収』の注記がある。

- (5) たとえば、『類篇』(09下-20-b-1)「𧈧」での「野官切」は、これに該当する韻が『集韻』にはない。
- (6) 『類篇』では、時々『広韻』の反切を使う。したがって、ここでの場合、『集韻』反切と同じものの中からという最初の条件をやや広げてここでは考察を加えたことになる。
- (7) もっとも、『集韻』で最初から落とされたのを、後に『類篇』の段階で補ったという可能性もある。ここでの『類篇』反切が、『説文』と一致し、『集韻』とあわないからである。しかし、『集韻』での大徐本重視の姿勢において、最初から脱落していたと考えにくいことからここに含めた。
- (8) 『類篇』(04上-25-b-1)の「𧈧」も同様である。異体字の「𧈧」は現行の『集韻』見える(上平・虞韻・虞小韻)が、先頭字の「𧈧」は見えない。さらに、『類篇』(10上-15-a-5)の「𧈧」も、下平・禡韻・卸小韻に見えない。
- (9) 『類篇』部首(05上-01-a-7)「竹」の『説文』音「陟玉切」が現行の『集韻』に見えない。この場合、又音の「張六切」と同音と見なされた可能性があることから、ここでは脱落と見なさなかった。なお、部首については、「𧈧」(05中-18-b-5)や「𧈧」(10下-28-a-3)・「𧈧」(12下-01-b-6)もある。ただ、この字は通行字ではないため、とりあえずここでの例に含めずにおきたい。
- (10) これと同じ例が、「𧈧」である。『類篇』(04上-28-a-5)での見出し音「吉侯切」では『集韻』に収めず、異読「俱遇切・居侯切」を該当小韻に収める。
- (11) 「𧈧」(06上-15-b-1)での「吉了切、吉酉切」や「𧈧」(06中-11-a-1)での「訖岳切、克角切」が、複数例現行の『集韻』に見えない。このような複数例はまれであるので、脱落が疑われる。しかし、他の脱落例と同様に、「原本集韻」に存在したという証拠を欠くため、考察の対象としない。